

市民団体 たちまち
交流拠点を整備、空き家の活用を模索
— 子どもたちや旅人も立ち寄れる空間へ

たちまち 篠崎千恵美・大川香菜



壱岐島：玄界灘にある面積134.63km²の島。人口26,207人(令和元年10月末現在)。古くから大陸文化の中継地として重要な位置にあり、「魏志倭人伝」には「一支国」と記されている。島の南西部にある国内最大級の弥生環濠集落「原の辻遺跡」をはじめ、島内には縄文・弥生時代の遺跡が多い。

共通点のある三天婦で市民団体「たちまち」を結成

長崎県壱岐島は福岡県と対馬市の中間地点に位置し、長崎空港からは空路で約二〇分、福岡の博多港から高速船で約一時間、佐賀県唐津港から約一時間半の距離にあります。私たちの活動拠点がある芦辺浦は島東部にある芦辺港のちようど対岸、車でわずか五分くらいの場所です。

「たちまち」が立ち上がったきっかけは二〇一七年秋ごろ、芦辺浦で「みなとやゲストハウス」を営む大川漁志・香菜が、地区内に旅人と地元の方の交流拠点となる食堂を立ち上げるため、同じく芦辺浦で「LIGHTHOUSE設計事務所」を営む篠崎竜大・千恵美に相談したことにさかのぼります。

ゲストハウスが開業してから、素通りされがちだった芦

辺浦に旅人が滞在し、地区内を歩くようになっていきました。しかし、昼食をとれる場所が少ないこと、旅人が求めている徒歩圏内の立ち寄り場がないことが課題となっていました。そして、地区への移住相談なども少しずつ増えていた中で、住める住宅の少なさが悩みの種となっていました。

関係者で話を進めていくにつれ、食堂をつくることだけを考えるのではなく、まち(地区)全体の未来のことを考えていかなければとの思いを持つようになりました。そして、芦辺浦の事業者それぞれが情報発信や地域活動をするよりも、事業者が一体になってまち全体のために活動したほうが効果的だと私たちは考えました。まずは、少ない人数ながらも元気いっぱいまちで遊ぶ子どもたちの、学校でも家庭でもない立ち寄り場をつくることにしました。

芦辺浦を、ふらっと人がたち寄るまちに、人と人の交差

点のような場にした
 ー。そんな思いで芦辺浦
 の事業者、同世代、子育
 て中という共通点をもつ、
 篠崎と大川、そしてピッ
 ツェリア「POTTO」
 を営む平山健人・みずき
 夫妻の三組で活動をはじ
 めました。

団体名・活動名・拠点
 名の「たちまち」は、巻
 岐の人が良く使うフレー
 ズから。島では「とりあ
 えず」という意味で使わ
 れます。全国的に使われて
 いる「早急さ」を意味する
 ものではなく、まさに私た
 ちの「まず、やってみよ
 う」の精神にぴったりで
 す。月一回の定例会では、
 これから何を話していか
 が必要があるか、どんな
 ことをしたら楽しいかを
 話しています。毎月少し
 ずつですが会費も出し合
 い、活動資金にしてい
 ます。

- 1 拠点をつくること
- 2 住まいの準備をすること
- 3 芦辺浦の情報発信をすること



芦辺浦に整備した「たちまち」の拠点。

子どもたちの立ち寄り場ともなる拠点の物件探しには紆余曲折がありました。最初に目星をつけた物件は長年空き家だった場所。しかし、私たちと同時期に他のUターンの方が契約され、現在も生活されています。結果、選んだのは車通りがあるメインの道路に面した場所。拠点ができれば芦辺浦の景色に少し変化をもたらすことができるといことで、二〇一八年七月に、食堂併設の拠点をここにすることにしました。当初、拠点は食堂と別々の場所に設けようと考えていましたが、幅広い世代の人が交流する可能性を考えて食堂併設と決めました。

同じ頃、芦辺浦の情報発信をするため、ウェブサイトを、SNSを立ち上げました。ウェブには元気いっぱい
 の芦辺浦っ子たちの写真を使用しています。

住民参加型ワークショップを経て拠点を整備

拠点づくりの過程で住民参加型のワークショップを実施しました。一回目は「こわして！ぬって！」と題し、まちの子どもたちと一緒に、拠点となる空き家内部の解体と、これから生まれ変わる壁や床、ガラスに落書きをしました。現状からどう空き家が生まれ変わるのか、空き家の持つ可能性をまちの子どもたちにも一緒に見て体験してほしいという想いがありました。実際にワークショップではプロの大工さんや大人たちと一緒に、空き家の中の不要な荷物を出したり、釘抜きなども子どもたちが率先して楽しく行な



第1回ワークショップ「こわして! ぬって!」の様子。

いました。

第二回は二〇一八年九月に「よって! かつたって!」と題し、二部制で実施。芦辺浦のまちについて昔の話を聞いたり、美味しいものを食べたり飲んだりしながらこれからのまちについて、ざっくばらんに語り合う場となりました。

一部目のテーマは「寄って、語って」。ま

ちに住む先輩から歴史や物語、大切にしてきたことの話、成功事例から失敗談まで寄って語る場に。そして、私たちの想いを参加者の皆さんに説明しました。

続いて二部目のテーマは「酔って、語って」。芦辺浦の飲食店に声をかけて拠点の前に屋台を出してもらい、飲食しながら「酔って語る」場をつくりました。

第二回ワークショップ開催にあたっては、自分たちの足で一軒一軒チラシを持って説明にまわりました。私たちが暮らす芦辺浦の皆さんを中心に参加いただきたかったからです。集客の心配をよそに、当日は一〇〇名近くが集まり

ました。

まちの人が一堂に会する機会はお祭り以外ではなかなかないものですが、高齢者から若者までさまざまな世代の方で賑わい、活発な意見が飛び交いました。この日が「たちまち」のターニングポイント、会を開いて良かったと思える大切な日になりました。

それから時間を見つけては、住民や旅人たちにもペンキ塗りなどに協力してもらいながら拠点の整備を進めていき、二〇一九年三月には併設の「CHILD I T O L I (チトリ) 自由食堂」ともに完成しました。

拠点と食堂が稼働してから最初のイベントとして、壱岐が舞台の小説『陽光』(松嶋 圭、梓書院)の展覧会を開催しました。さらに、使われなくなったおもちゃや不要になった文房具や本などを、子どもたちとともにリヤカーを引いてまちなかを歩き、呼びかけて集めました。現在は毎週月曜日と金曜日の午後三時半〜五時、小学校の放課後の時間に拠点を開放しています。まちの皆さんから集めたおもちゃや文房具を使って遊ぶ子どもや宿題をする児童たちの風景が日常になってきました。

地道に続けていく空き家調査

前にも触れたとおり、ゲストハウスとの関わりをきっかけとして、島に住みたいという声も出てくるようになってきました。



拠点「たちまち」の館内。



「たちまち」は子どもたちが立ち寄る場所にもなっている。

「住むところはどこかしらある、これだけ家があるんだから」と最初は思っていたのですが、活動を始めて「手をかけずそのまま住める家がない」ことに気づきました。そして「住まいを準備しよう。しなければ」と強く思うようになり、自然と動き始めました。

そのために私たちがとった行動はとにかく歩いて回ることに。「おばあちゃん、あそこん家はだれんと?」「何年空いとる?」「どっか空いちよる家ない?」と尋ねるのです。

現在のメンバーのうち三人は芦辺浦出身です。「あーた、

どこで(どの家の人)?」と身元確認から始まり、いろいろ話していくうちに「あー、あそこんで」となり、安心して話をしてくれるようになります。直接面識がなくても、屋号や両親の名前を伝えると理解してもらえることもあります。小さなコミュニティの特徴で、すぐにつながる。そして、所有者に連絡してくださり、私たちへとつなげてくださる方もいます。

所有者やそのご家族は島外にいらっしゃることもありますが、島の現状や私たちの活動のことを丁寧に伝えるようにしています。そうして数カ月をかけて一軒の空き家の玄関がようやく開き、中に入れてもらう。今はこれを繰り返ししています。

「古民家改修」とよく聞きますが、この島にそんな立派な物件が何軒あるでしょうか。今までに関わったほとんどの空き家は、親世代が建てて住んでいたけれど子ども世代が島外へ行き、住む人がいなくなって何年もそのまま放置されたもの。親もいなくなると、家を訪ねない期間は自然と長くなり、いずれ誰も寄らない場所となつてしまします。

今はまだ親戚や近所の人が、風通しのため窓を開けに来る家や、台風の後を確認に来てくれる家もあります。いつまで出来るのか時間の問題だとも感じていきます。

連絡がとれた空き家の所有者に今後家をどうしたいの
意向を聞くと、ほとんどの方が「手放したい」とおっしゃ
います。「息子に空き家という負の遺産を残したくない」周
囲の人に迷惑をかけたくない」「島に帰ることがない」など
と聞くと複雑な気持ちになります。しかし、「仏様がある
から」「手放したいが権利者が複数に分かれていて全員の
許可をもらうことが難しい」「なるべく高値で売却したい」
といった声もあり、スムーズに手渡せない状況もみられま
す。その間にも家はどんどん老朽化しています。

お話をうかがう中で、「あの人は元気にしよ
るやろうか」「ようご飯食べさせてもらいま
った」「がられ(怒られ)よってですね」などと、
住んでいた当時の思い出を耳にします。そんな
ことをうかがえて、最近はこの活動をしてよか
ったなと思うようになりました。

これらの空き家をこれからどうしていくのか。
じつは、今動きながら考えているところで、明
確な答えや方法はみえていません。空き家単体
で考えるのではなく、まち全体の中で空き家を
どう捉えていくか考えることも大事にしていま
す。そして、どんな人がそこに住むのかもとて
も大切なことです。

その場所を大事にしてきた人がいるのなら、
これからもそうしていきたい。そして大事にし



2019年2月に吉崎市と空き家問題対策で協定を締結(中央が白川博一市長)。



空き家と移住の相談窓口「イエマチ」の藤木彩乃さん(中央)と「たちまち」のメンバー。

てくれる人に手渡していきたい。このまちを好きだと言っ
てくれる人と一緒に。思いだけでは何もならない、と
いう声もあります。でも思いがなければ何もはじまらない、
人と人との関係はつくれない、そんな考えで私たちは動い
ています。

移住と空き家の相談窓口を拠点内に設置

二〇一九年七月に、吉岐市の地域おこし協力隊員が常駐
する移住と空き家の相談窓口「イエマチ」が拠点の一部に

開設されました。同年二月に壱岐市と「たちまち」が、芦辺浦における空き家問題について、互いに協力して対策していこうという協定を結んだのがきっかけです。市庁舎の中ではなく、まちの中に移住と空き家の相談所ができたのは島内でここがはじめてでした。

実際に島に住み、働くことを目指すにあたり、住むかもしれないまちの中でその雰囲気を感じながら相談できるのが魅力だと思います。

地域おこし協力隊としてこの担当者になったのは、「たちまち」の第二回ワークショップにも参加し、まちの人と力を合わせて暮らしたいと移住してくれた藤木彩乃さん。移住して半年近くが経ち、まちの人との距離も縮まってきました。時に所有者の方の家庭事情に踏み込んでお話をうかがわなければならず大変なこともあります。少しずつ相談をいただけるようになっていきます。

関係人口を増やし、まちを盛り上げる

島の方から「芦辺浦は最近盛り上がってるね」といろいろなところで言われるようになりました。

急激にまちの人口が増えたり、お店が増えたりしたわけではありません。おそらく今まで島内では素通りのまちだった芦辺浦で、生業をもつ者同士が協力し合い、動き出したこと。昔からある商店が数軒あるのみだったこのまちに、若い世代がお店を始めたり、島外から移住してきた方がい

ること。わずかな変化だけれど、今まではなかった新しい動きによって、盛り上がっていると感じていただいているのかもしれない。

メンバーはみな生業をもっていて、そのかたわらで活動をしており、活動時間をつくるのが難しいときもあります。ですから、その状況なりにできる人がやるというスタンスで続けています。「まちのために」という緊迫した使命感が先にきているのではなく、自分たちの手の届く範囲から楽しいこと、できることをしています。

そして、このまちを好きになってくれる人が少しずつ増えて、楽しく生活したいと思っています。まちに住んでいる人もこのまちの未来に希望を感じて生活していく。応援し合えて、ときには何かを一緒に行動に移せる。そんな緩やかな繋がりを持ちあえるまちになればと思います。

篠崎千恵美 (しのぎちえみ)

1979年、壱岐島石田町生まれ。高校卒業後、東京や福岡のテレビ局で番組制作などに携わる。2008年に島にUターンし、島出身の同級生で一級建築士事務所の夫と篠崎竜大建築計画事務所(現LIGHTHOUSE設計)を設立。インテリアコーディネーターとして活動。2児の母。

大川香菜 (おおかわかな)

1984年生まれ、岩手県陸前高田市出身。高校卒業後、東京で暮らし続けていたが、東日本大震災後に長崎市に移住。2013年に海女後継者として壱岐市地域おこし協力隊に採用され、2016年まで活動。現在、島出身の夫と「みなとやゲストハウス」を経営。1児の母。